

井上 章一著

『 霊柩車の誕生 』

朝日新聞社（1984年・1800円）

村上 興匡

都市部におけるとむらいの風俗は、近代にはいってから大きくそのありようを変えてきたが、そのことが学術的な議論の組上りにのことはあまりなかった。都市民俗学の先駆的な論文として千葉徳爾の「都市内部の葬送習俗」があるが、普通、葬儀に関した研究といえば、村落共同体における、伝統的な葬儀を対象としたものばかりである。本書では葬祭業者の社史やインタビュー、当時の新聞、随想などにあたることによって、都市部における葬送習俗変化の大筋を描き出すことに成功している。前例の少ない領域だけにその意義は大きいといえよう。

さて、著者は建築史、意匠史を専門としており、本書もたんに習俗上の変化のみを扱ったものにはなっていない。本書において著者が何を目指したかは、「はじめに」の部分に明確に記されている。まず、著者の霊柩車研究のきっかけは、あの日本の霊柩車独特の、「官型」の和洋混合デザインの特異性への興味であったこと。そして研究の出発点として、a) いつどこで霊柩車ははしるようになったのか、b) それはどのような（社会的な）背景と経緯によってか、c) なぜあのようなデザインの車がつくりだされたのか、の三つ問いをたてている。その上で、霊柩車はとむらいの風俗のうつりかわりの中から生まれたのであるから、d) 葬送風俗全般の把握が必要であるとする。

本書における議論は2つの視点からなされているのがわかる。官型霊柩車の「官型」にかかる論と「霊柩車」にかかる論である。いわば本書は「官型」の意匠論的な分析を中心に、その官型「霊柩車」の生成および、それを生みだした都市葬送習俗の変化をあきらかにしようとしたものであるといえる。その流れのうちには、「官型」意匠こそ「霊柩車」によってひきおこされた葬送形式上の変化の本質に深くかかわる、

という著者の考えがあるからに他ならない。

本書は「(1) キッチュの意匠」、「(2) 明治時代の葬送」、「(3) 霊柩車の誕生」、「(4) とむらいの諸相」、「(5) 霊柩車についての断章」の5つの章からなる。a) から b) までの論点は各々、(1) から (4) までに明らかにされる。(5) はいわばおまけで、「本書の記述のコンテキストからははずれているが書き落すには惜しいエピソード」が書かれている。(5) ははぶいて、(1) から (4) の議論の内容を私なりにまとめてみたい。

- (1) 議論の前提として、官型霊柩車の意匠上の特性について論述がなされる。i) 官型霊柩車の分布は都市部に集中している。ii) 「官型の意匠は歴史様式からの借りものの寄集めであり、伝統の権威による顕示効果をねらった「キッチュ」の意匠である。それは大衆の造形感覚であり、文化のエリートからは嫌われた。iii) 霊柩車（洋型）は大正のはじめか都市部でつかわれるようになるが、昭和のはじめ、大阪で「官型」がつけられると、急激に各都市に伝播した。
- (2) 霊柩車以前の葬送形式として明治のそれが語られる。明治期になると社会的な威儀を飾るため、葬儀が派手なものになる。葬祭業者等の発達により、特に葬列が長大なものとなる。その中で葬列は人に見せるためのものとなり（葬送の「見世物」化）、葬列を聖なるものと感じる心性が衰弱してくる（葬列の世俗化）。
- (3) 大正期になり、葬列の聖性喪失にくわえて、交通手段の発達で都市環境がかわり葬列の維持が困難になると、「中流以上」の人々も葬列を廃したり夜間の密葬を行うようになる。それで葬儀屋が人足のかわりに自動車で遺体を運ぶことを考えだす。霊柩車の本質は葬列の時間と金の無駄をはぶく近代的な合理精神

にあるが、その無駄を愛し葬列をなつかしむ心も残っていたため、「葬列を暗示させるにぎやかで古風な装飾」をもつことになった。元来下流階級のものである「宮型」の意匠の都市部における急激な普及は、大衆社会成立による階級間格差の平準化と関係している。

(4) 葬送以外の、大正期の葬儀形式の変化として、葬式の告別式化、服喪期間の短縮、通夜と葬式の混同、礼服の喪服化について考察がなされる。それらの変化は、葬儀の脱聖化＝世俗化およびゲゼルシャフト化によるものであると説明される。

霊柩車の形態の分析からその本質にせまるといやり方はユニークであり、それによって葬送風俗分析に新しい側面が見いだされることになると思えば、意義深い。

しかし全体を読んでみての感想は、いまひとつ期待だおれである。くいたりない印象がある。(1)の意匠論的な分析においては、帝冠様式や擬洋建築といった建築史の様式との「宮型」との比較や、双方に対するモダニスト等の建築家達の反応などを紹介しながら、「宮型」意匠の、過渡期性、大衆性、バイタリティーといった諸特性が、相互に立体的、有機的に述べられている。これはかなり面白いのだが、それが社会史分析に充分生かされているとはいいがたい。社会史分析の視点に特に目新しいものはない。大衆社会論、世俗論といった既成の社会史の文脈をあてはめて、「宮型」意匠の特性を個別に説明しているにすぎない印象をうける。

明治以後の葬儀変化についての著者の議論は、葬送の「見世物」化とそれに伴う「聖性」の衰退である、とまとめることができる。「葬送は、死者をあの世へ送る儀礼であり、本来はそれ自身の象徴秩序をもっていった。しかし、世俗的な虚栄心はそうした秩序におかまひなく葬送を肥大化させ、結局はこの儀礼を成り立たせている聖性を弱め……葬送そのものを瓦解させてしまう。」

葬送は次第に見世物化し、聖性を失うが霊柩車の登場がこの傾向を決定的にする。自動車で遺体を運ぶことは、葬送が一種の運送事業にな

ったことであり、世俗化は明らかである。そこでは儀礼としての象徴秩序は考慮されず、純粋なスペクタクルにちかい状態で葬送形式が演出されるのだ、という。

一つここで問題となるのは、著者は脱聖化といひながら、何をもって聖としているかほとんど語っていない点である。

新聞投書などの葬列に対する感じ方から聖性を測っているようにも見える。だが、聖性をそのような一般人の感覚として捉えるなら、(5)にある霊柩車の日常規則からの逸脱性や霊柩車にまつわる迷信などはどう説明するのか。

葬列が霊柩車と本質的に違うというためには、葬列のもつ象徴秩序がどんなものであるか明らかにする必要があるだろう。本書ではそれについてまったく触れられていない。従来民俗学等においても、それについて定説といえるほどのものはないはずである。

ここではすでに、葬列による葬送は聖なる儀礼だが、霊柩車によるそれは世俗的運送事業であるということが公理として語られてしまっている。

ただ、伝統的なものは聖なる象徴体系としての意味があり、それが何らかの変更を加えられれば聖性がよままるというのであれば、「聖性という内実を失って伝統様式が崩壊した」という著者の論法はトートロジーじみたものになってしまう。葬送における聖性の意義について、より深い検討が必要だったのではないだろうか。

著者は葬送の見世物化を世俗的虚栄心ゆえとするが、社会的儀礼としての葬儀の中に、もともと「できうるかぎり葬儀を派手にするモメント」があるとも考えられる。本書にも、すでに江戸時代から、葬儀が派手になる傾向があり、それを外側から抑制する格法、検約令があったことが書かれている。R、エルツによれば、「葬儀において喪家のものが家財を消費する」ということが、死者を完全に祖霊化し、喪家のものを「喪」から解放することに大きく貢献するのだという。葬儀における「真摯さ」等に聖性をみて、葬儀のスペクタクル化＝世俗化(脱聖化)とみる見方は、あまりに葬儀における聖の「祭儀」

的側面を見て、「祝祭」的側面を見ぬやり方であるとはいえないだろうか。

著者の主要関心が意匠にあり，以上のような議論はやや専門外であることを承知で不満を述べてみた。

近代から現代にかけて，葬儀の中心的行為が

「葬送」から「告別式」に移ってゆく。その意味では葬送は脱聖化しているのかもしれない。霊柩車の誕生はその変化の一端を担っている。その変化の意味を考えることは、「とむらいの本質」をさぐる上でも，現代における死の意味をさぐる上でも，重要なことであると思われる。